

特別展示「念仏行者徳本—行脚の足跡と女人救済—」

俵谷和子（当館学芸員）

はじめに

江戸時代の念仏行者徳本（宝暦8か～文政元年<1818>）は、紀州日高郡志賀村久志（和歌山県日高町）出身の浄土宗僧である。宗祖法然が説いた専修念仏の実践者であり、だれもが理解できるわかりやすい教化で阿弥陀如来との結縁を説いた。その教えは、庶民から大名まで幅広い層の人々に浸透し、多くの篤信者を得た。

27歳のころ出家した徳本が、和歌山の山中で米などの穀を断ち、ひたすら念仏修行を行っていると、木魚を叩きながら「南無阿弥陀仏」と唱えるその声が周辺の村まで聞こえ、少しずつ人々に知られるようになっていった。

灘の酒造家（神戸市東灘区住吉）吉田道可は、熊野詣のおり山中で激しい修行をする徳本の噂を耳にし、息子喜平次とともに自身の所有地内に念仏道場を設け請待した。この摂津地域での布教活動が、のちの全国行脚への契機になったといえる。

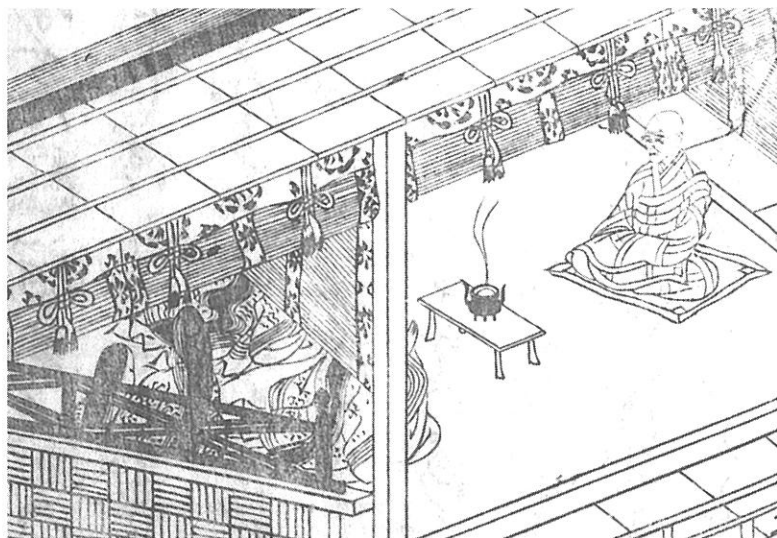
増上寺典海の要請で江戸に下向した際の徳本の人気の高さは、目を見はるものがあり、江戸の文人で医師でもある加藤曳尾庵は、自身の随筆『我衣』⁽¹⁾にその様子を次のように記している。

文化11年（1814）7月のはじめ、江戸四里四方の老若男女が大いに群集することがあった。その原因は紀州の山奥のひとりの聖、徳本である。人々に日課念仏を勧め十念を授けている。徳本の滞在する伝通院には、日昼日夜人々が押しかけて、その数は幾千ということはない。押し合いのあまり悶絶する老人も出た。



【写真1】木造徳本行者坐像（徳本寺）

また平戸藩主松浦静山の『甲子夜話』巻50⁽²⁾に、永昌寺栄順（徳本の随従者）との対話として、大奥の年寄衆や女臈などの十念授与のときは、徳本と同じ一間に居ることはなく、徳本が現れると下間に平伏して首をあげることがなかったと記している。同書巻



【写真2】仙洞御所での得度に集まる女房たち（『徳本行者伝』）

93には『当時随筆珍事

録』を引用し、世にいう徳本流の念仏は、巨大なる木魚と大きな伏せ鉦を置き、信者が集まってその木魚と鉦とを乱調に打叩いて、異口同音に声を張って念仏するのだと記している。当時の人気ぶりと激しい念仏唱和の様子がみとれる。

行脚のなかで徳本は、人々に日課念仏の請願や念仏講の結成を促していくが、念仏講に対しては講員の人数にあわせた六字名号を講の本尊として付与し、講の結束を固めさせた。これら念仏講などでは、徳本に申請して付与された名号を石碑に刻んで建てていった。徳本念仏塔や名号碑などと呼ばれており、各地に残された石碑の数は1000基をこえるという。

このように一世を風靡した徳本が、江戸小石川の一行院で没してから、今年が200年目にあたる。当館では、これにあわせて阪神地域における徳本の足跡を紹介する展覧会を開催する運びとなった。現在では埋もれてしまった徳本行脚の痕跡を、多くの初公開となる資料からたどる。

1. 徳本の誕生

『徳本行者伝』⁽³⁾などによれば、徳本は紀州志賀村の農夫田伏三太夫と塩崎政の子として誕生した。田伏家は畠山尾張守政長の末裔といい、政長が明応2年（1493）に河内国正覚寺の城にて戦死した後、遺児尚順・久俊兄弟が紀州の山林にのがれ、家名を隠して潜居した。久俊より七代の孫が徳本の父三太夫だという。夫婦には男子が恵まれず、三宝（熊野権現とも）に祈ったところ、母親が蓮華を飲む夢をみて（仏舎利を得たとも）宝暦8年（1758）6月22日午の正中に男児が誕生し、三之丞と名付けられた。その時は、部屋中香りが満ちてただごとならぬ雰囲気だったという。

徳本がはじめて「南無阿弥陀仏」と唱えたのは、まだ襦袢（オムツ）の取れない1歳ごろのことで、姉に抱かれ中秋の名月の美しいさまを見たときだった。その後、4歳の幼い徳本にとって衝撃的な出来事が起こる。隣家の子供が夭逝したのである。仲良く遊んだ友の姿が急に見えなくなり、どこへ行ったのか、会うことはできないのかと母親に問うと、貴賤男女、賢愚老少を問わず死を避けることはできない、これを嘆くのならば念仏を唱えなさいと返答される。これを契機に徳本は常に念仏を唱えるようになったと言われる。

9歳で両親に出家を乞うも許されなかったため、常の念仏をかかさない日々が続いた。そのような中、親類である大滝川月照寺（浄土宗）大良のもとで別時念仏（期間を決めて念仏をすること）を行うなど、さらに専修念仏へ傾倒していった。

天明4年（1784）、財部村往生寺大円について出家得度し徳本と改めた。翌年、法然の遺跡（報恩講寺）で千津川・須谷での苦修練行を発願し、ここから法然院で剃髪するまで有髪の念仏行者として自行策励の時代に入った。

2. 徳本の布教活動

法然院にて比丘形となった徳本は、教化のための行脚を本格的に開始する。

徳本の宗教活動の中心には、法然の一枚起請文が置かれている。一枚起請文とは、入寂間近い法然が弟子源智に対し遺言として残した文書で、浄土宗の要である。法然は、自分の説く念仏は高僧たちの説く念仏ではなく、阿弥陀の住処である極楽世界へ往生するための念仏である。往生するには、ただひたすら「南無阿弥陀仏」と極楽往生できることを疑わずに唱えることである。このことが正しい私の教えであることの証明として両手印を押す、と記している。

徳本が一枚起請文と出会ったのは、安永4年（1775）冬のある雪の日出来事だと『徳本行者伝』には記されている。年老いた回国行者より一枚起請文を授かり、以後常に護持していたという。徳本の勸誡では、一枚起請文の解説が必ず語られている。

徳本の布教の様子をまとめた『徳本御勸誡聞書記』⁽⁴⁾は、徳本の語り口調がそのまま記録されており、臨場感がある。少し紹介すると、「元祖上人一枚消息（一枚起請文）の通、此のほかには奥深きことはさっぱりない。もしこのほかであれば邪義というもんだ」、「みんなお念仏を申して死ぬのではないぞ。お念仏を申して極楽へ往生するのじゃ。往生とは往き生まると書く。ここをよう合点してみようぞ。仏法には死ぬる法は教えはせぬ。たとえ十悪五逆をなした人でも心をひるがえして南無阿弥陀仏と申せば極楽へ往生をする」と民衆に熱く語る徳本の姿がみてとれる。

日課念仏としてたくさんの念仏を唱えるために、念仏の回数を数えるためのお助けアイテムも生み出している。『武庫郡誌』⁽⁵⁾には、「名号の縁に千個の圈点を付したもので念仏十度唱ふれば一圈を消して行くのであるから圈点の凡てが消され

たならば、一万遍を唱へた事になる」とあり、1万回の念仏を数えるための刷り物を発行していた（写真3）。

また、名体不離の尊像や利剣名号⁽⁶⁾といった名号も日課念仏の回数や講の人数に応じて授与していた⁽⁷⁾。徳本の記す六字名号は独特の筆跡であるが、その下もしくは、左側に必ず徳本の名と印が記されている（写真4）。印は、「鬼殺す 心は丸く田の中に 南無阿弥陀仏に 浮かぶ月かな」の意が現されている。

3. 西宮市域の徳本名号石

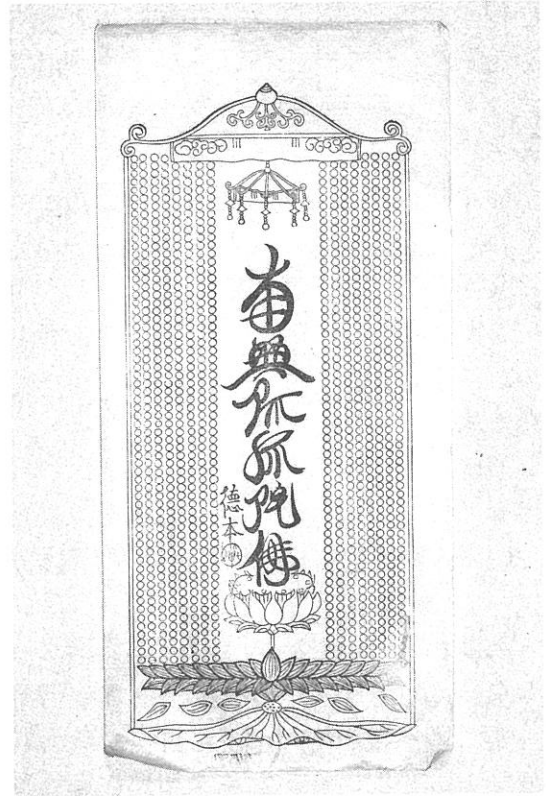
先述したように、徳本行者が行脚した場所には、徳本から付与された六字名号の掛け軸や篤信者たちによって建立された名号石が残されている。西宮市域では徳本の来錫によって結成された念仏講の存在は確認されていないが、独特の筆致で記された六字名号が刻まれた名号石は残されている。ここでは、西宮市域の名号石について紹介したい。

堀内冷氏が昭和41年4月発行の『西宮文化』10号に、瓦木、生瀬、鳴尾、森具において名号碑12基の存在を確認したと紹介している。筆者自身が確認できたものは、全部で13基（表1、写真5～17）ある。年代のわかる一番古いものは、日野町にある文政6年（1823）のものである。この六字名号は、角柱形の花崗岩に刻まれ、その台石には施主の名前が複数刻まれている。徳本没後七回忌に合わせて建立されたものと思われる。

この名号石が建立された時の様子を伝える資料が残されている。西宮市指定文化財「岡本家文書」の「大庄屋日記」と称される歴代当主が記した日記である。文政6年（1823）7月15日条として、

一、武庫川堤西芝檀へ名号石立建申候。六月廿九日今津浦より新堀川船二而運送。晦日着直様建拵いたし七月朔日出来、二日開眼供養仕候。

とあり、今津から船に乗せて新堀川を遡上し、名号石を据えて開眼供養を行なっている様子を記している。日記の記事と名号石に刻まれた年代が一致している。



【写真3】 圈点に印をつけ、念仏の回数を数える



【写真4】 徳本の印

【表1】西宮市域の徳本名号石

所在地	建立者	目的	年代	備考
浄橋寺 (生瀬2丁目)	—	—	文政7年9月15日	【写真5】
松並墓地 (松並町)	中新田岡本権右衛門	供養(法界精霊、先祖代々)	—	【写真6】
武庫川西側 (日野町)	下新田好井氏弥兵衛他9名	—	文政6年8月	【写真7】
西方寺 (鳴尾町)	—	—	—	【写真8】名号石：砂岩 台石：花崗岩「廿二世壽誉」
小松墓地 (武庫川町)	樋口市右衛門	供養	文政8年3月	【写真9】
小松東墓地 (武庫川町)	座主廓誉	—	文政7年10月	【写真10】
小松東墓地 (武庫川町)	—	卵塔墓(性誉上人)	明治4年6月15日	【写真11】
阿弥陀寺 (郷免町)	—	廿三世本定和尚	明治23年5月4日	【写真12】森具墓地に祐天筆の六字名号の墓碑あり
阿弥陀寺 (郷免町)	第二五世軌誉	徳本百回忌	大正6年10月6日	【写真13】
森具墓地 (郷免町)	—	墓碑(釜谷愛)	明治23年7月4日	【写真14】
森具墓地 (郷免町)	南野幸太郎	為先祖累代精霊	明治34年7月24日	【写真15】
森具墓地 (郷免町)	南野百合雄	先祖代々供養	昭和47年7月11日	【写真16】
森具墓地 (郷免町)	—	供養	平成元年2月19日	【写真17】

北部生瀬の浄橋寺、南東部の小松墓地、小松東墓地にある名号石は、文政7年(1824)、文政8年という紀年銘を持つため、これらも日野町のもと同じく七回忌を契機として建立された名号石だと推測される。ちなみに、森具の阿弥陀寺にある大正6年(1917)の名号石は、百回忌を記念して建立された。このように徳本の年忌の機会に建立される名号石は多く、徳本への信仰が一過性のものではないと指摘される要因ともなっている⁽⁸⁾。和歌山県下では、徳本が没した文政元年(1818)から文政12年(1829)までの間に50基建立されたとの報告がある⁽⁹⁾。

西宮市内の名号石の分布をみると森具地区が最多で、6基ある。これは、阿弥陀寺第23世本定が徳本の孫弟子であったこと、また隣接する芦屋市打出にある親王寺住職徳苗が徳本の弟子であったことによる影響が指摘できる。

特筆されることとしては、阿弥陀寺本定の墓碑が2基あることで、1基は阿弥陀寺境内に所在する徳本筆の六字名号で、もう1基は森具墓地に祐天筆の六字名号である。いずれも明治23年(1890)の建立である。



【写真5】 浄橋寺の名号石



【写真6】 松並墓地の名号石



【写真7】 日野町の名号石



【写真8】 西方寺の名号石



【写真9】 小松墓地の名号石



【写真10】 小松東墓地の名号石



【写真11】 小松東墓地の名号石



【写真12】 阿弥陀寺の名号石



【写真13】 阿弥陀寺の名号石



【写真14】 森具墓地の名号石



【写真15】 森具墓地の名号石



【写真16】 森具墓地の名号石



【写真17】 森具墓地の名号石



【写真18】 祐天の名号石(全景)



【写真19】 祐天の名号石(近景)

祐天（1637～1718）は浄土宗増上寺第36世の法主となった人物であり⁽¹⁰⁾、祐天筆の名号石も徳本の比ではないが各地に建立されている。『徳本行者伝』によると祐天の六字名号を手本として徳本が名号の練習を行なったとする伝承が残されている。ちなみに、森具墓地入口には、祐天筆の名号石がもう1基存在している。

西宮市における名号石の数は、徳本の来錫があった神戸市を除けば、阪神間の中では比較的多いといえる。

むすび

法然の再来と言われ、浄土宗の要である一枚起請文を核として各地を行脚した念仏行者徳本。多くの人々がその篤信者となったが、とくに女性たちからの熱心な信仰が

注目される。古来女性には五障があり、変成男子（女性が男性に転じる）しないと成仏できないとされきた。一方、「葉王菩薩本事品」には、阿弥陀如来が女性を救うと説かれており、女性も往生できたのである。しかし、平安時代藤原氏の台頭と末法思想により、貴紳たちの弥勒出生を待つための手段として阿弥陀信仰が急速に広がったため、女性は再び往生できない存在となった。法然も女人往生を説いたが、変成男子は必須であった。これを救ったのが徳本である。徳本は法然の教えを基本としながら、時代と人々の要請に合わせた布教活動を行なった。展覧会では、徳本の宗教活動とともに、江戸時代後期の社会が求めたものをあわせて見ていただきたい。

註

- (1) 『日本庶民生活史料集成』第15巻
- (2) 東洋文庫 平凡社
- (3) 『徳本行者伝全集』第5巻
- (4) 『徳本行者伝全集』第4巻
- (5) 『武庫郡誌』 復刻版
- (6) 名体不離とは、阿弥陀の仏体とその名である「南無阿弥陀仏」とは一体であるとの考え方で、徳本の道歌に「唱ふれば 姿が声にあらはれて あみだとまうす 仏也けり」とある。利剣名号はあらゆる悪を打ちくだく名号として付与された。
- (7) 講員数50名以下の念仏講には小幅名号、50名～100名には中幅名号、100名以上には大幅名号がそれぞれ授けられた。日課念仏の請願に対しては、100～900遍までは拝服名号、1,000～9,000遍は小幅名号、10,000～30,000遍は中幅名号に数珠、40,000遍よりは利剣名号、50,000遍には利剣名号に金仏1体、60,000遍には直筆名号を授けられた。
- (8) 松村雄介「徳本念仏-宗教信仰への回帰-」（『日本の石仏』）
- (9) 塩路善澄『徳本行者を慕いて-郷土での足跡-』青山社
- (10) 祐天も住持を持たず、50歳から諸国を遍歴した。

寄贈資料一覧（平成29年3月現在、敬称略）

「颯風新話 乾」1点・「颯風新話 坤」1点・「摂州神崎よりおなしく境川迄の名所記 西摂名所記」1点・「摂州名所荒増巡覧記」1点・「西摂兵庫名所記」1点（長濃タカ子）／太閤窯製品（花入）1点（長濃タカ子）／絵葉書（ホテルパインクレスト）1点（西尾嘉美）
ご寄贈ありがとうございます。

目次

CONTENTS

第33回特別展示「念仏行者徳本一行脚の足跡と女人救済―」（俵谷和子）…1
寄贈資料一覧… 8

西宮市立郷土資料館ニュース第47号 平成29年（2017年）7月31日